

大誓願を光闡し玉ふとは、論文の上で云へば三種成就は願心の莊嚴と知るべしとあれば、一論の全體が横超の大誓願を開き顯はしたと申して可然なれ共、要を取りて云はゞ觀佛本願力の四句が正しく之に當ると知るべきぢや、長行に彼の四句を擧げて即見彼佛、未證淨心菩薩、畢竟得證平等法身、與淨心菩薩、與上地諸菩薩、畢竟同得寂滅平等故とあるが正しく横超の相である、

廣由本願力、廻向、爲度群生、彰一心、

此二句は古來非常に六ヶ敷釋してある、爾るに古人が多く廣の字を解し損ふて夫が爲に講義が煩はしく成つたのである、是は文章の上を十分氣附かれなんだ故である、石泉の要訣に始めて氣附いてある、愚は要訣を見ぬ先きに百方苦辛して考究の末に、略鈔の偈と對照し、廣の字は全く群生の字と照應したものと氣附いて大きに悟つた事なるが、後に要訣を見れば早く氣附いて倒裝の語ぢやと云ふてある、古人と暗合して大きに愉快を感じたのである、倒裝法と云

ふは文章の上で後に置く文字を先きに置く一種の變則がある、蓮如師の文にも、若し宿善開發の機にても我等なくばとあるが倒裝文なので、我等の二字を若しの下に置くべきを顛倒して末の方に置かれた、倒裝を心得ぬと文意を誤解する事である、今も廣の字は度の字の上に置くべきを、文では句の都合悪き故に最初へ置かれたものである、略鈔の偈には廣の字をやめて由本願力、回向故とせられた、夫で愚は廣の字は大した必要ではない、只下の群生の文字の爲

めに此字を置かれた事と味ふたのである、

扱、此二句は論主が我一心と自督を宣說表白せられたのが自利即利他の妙用ありて、他力回向の一心を彰はして、眞實報土の正因を愚鈍の衆生に知らしめ玉ひたる事ぞと讚嘆せられたものである、之を本願力の回向に由ると云ふは、論主の一心歸命の眼目は不虛作住持の功德を認められた所である、不虛作住持が即ち往還二種の回向である、不虛作住持と云ふが本願力の代名詞である、觀佛本願力と佛願力を認

めて發起したる論主の一心なれば、此一心が取りも直さず本願力回向の賜ものであるから、之を廣大无碍の一心と云ふ、論主は此一心を表白して普共諸衆生往生安樂國と述懐せられたるは、善惡の衆生吾れと共に本願力回向の一心を以て安樂世界に往生すべしと勧められたのである、此深旨を發揮して、廣く本願力の回向に由て群生を度せんが爲めに一心を彰はし玉へりとは頌せられたものである、此意を以て略鈔には論主宣布の廣大无碍、一心、普遍開化

雜染堪忍、群生と稱讚し、又信卷には合二爲一の釋を設けて、愚鈍、衆生解行爲令易故、論主合二爲一歟と示された事である、因に又此彰一心に就て勦說に六義を開きたるを五部評に引用してある、此の中愚見では前の五義は結構である、第六義は面白からず、第一は群生の爲めに一心を彰はすとは、菩薩の一心願生は利他の爲めであるから、淨土に參りて衆生を利益せんとして我一心と自らの信心を彰はした者と云ふ、此義文軌の外は皆同じ、第二は一切衆生の佛

因を知らぬ者に一心で生れると彰はしたと云ふ、是は惣釋なり、第三は三心卽一心の義を知らぬ者に其義を知らせん、一心を彰はしたと云ふ、是は上に云ふた信卷の釋に據つたもの、第四は三心卽一と知つても機の計いを忘れぬものに、本願力ぢや程に已を忘れて一心に頼めと彰はしたと云ふ、是は上の本願力回向に掛けて釋したものの、第五は已を忘れて彌陀に歸しても後に變りてはならぬ、一心になれと勧めたものと云ふ、是は相續に掛けて釋したものの、皆な

難有い事なれ共、偈の文句に當て、味ふ邊では愚見は上に述べたる如くである、

歸入功德、大寶海、至入生死、苑示應化、

此以下六句は論の五因五果の法門を祖師咀嚼して、他力横超の利益を頌して論主の深旨を發揮せられた偈文である、五部評には諸註を引いて長々と講じてあるが、今は大要を摘んで味ふて置く事とする、先づ五因五果とは禮拜、讚嘆、作願、觀察、回向の五因を以て近門、大會衆門、宅門、屋門、苑林遊戲地

門の五果を得る事に配當したもので、是は論主の施設である、即ち正定聚を分けて近、大二門とし、滅度を分ちて後の三門として示されたものである、爾るを今偈には歸入功德の第二の大會衆門を頌し、得至蓮華の二句で第三の宅門を頌し、遊煩惱林の二句で第五の園林遊戯地門を頌して、他の第一と第四を此中に攝したもものなり、因て六要にも此三門肝要なるが故にと釋せられた、其義云何と云ふに、五念門は元來一心中の具徳を開いて施設したももの、而して五

果の利益を本願に當てる時は、近門大會衆門は十八願にして、宅、屋二門は十一願の益なり、第五門は廿二願の益たる事明かである、爾る時に五念門の上で安心に當るものは第二の讚嘆門である、即ち名義に隨順して稱名するのであるから、是が正信念佛である、由て因の方では此讚嘆門が肝要であるから十八願の持前として之を擇び、次に第三門は蓮華藏に入るとあれば、果の方の至極であるから十一願の持前として之を擇び、扱、第五門は還相の方で衆生利益

の至極なれば、廿二願の持前として之を擇んだものである、此の如く因で一門、果で二門を擧げて、五因五果を三願に歸して一因一果の實際を發揮し、論主が速得成就阿耨菩提と絶叫されたるは斯様な相たるぞと知らせるのが此六句の偈文である、此義五部評に委曲してあるが大體は右にて合點すべし、扱、功德大寶海の五字は論偈の文を取つたもの、爾るに論偈では本願力に値遇すれば速かに無上の功德を其身に満足せしむとありて、信心の行者が身に受く

る方で示してある、夫を今は所歸の法體として之に歸入すればと云ふたもの、其論偈と旨を異にする譯を蹄涔に釋して、大寶海の名は教行信證眞佛土何れにも通ず、但し是れ一句の南無阿彌陀佛なり、教とすれば所稱の名號なり、行とすれば稱名の大行なり、故に行卷には眞如一實、功德寶海也、故名大行と云ふ、信とすれば金剛の信心なり、證とすれば薩婆若海なり、眞佛土も思ふて知るべし、論偈には彌陀所具の无上功德を稱したものなり、今は本願の大

智海を指す、行卷に大小聖人、重輕惡人、皆同齊應歸選擇、大寶海、念佛成佛とあり、此大智海に歸向趣入する故に歸入と云ふと、諸説あれ共私は是で足ると思ふ、

必獲等とは、必の字は自然をあらはすと銘文に釋してある、上の如く本願の大智海に歸入すれば願力の自然でと云ふ心なり、大會衆の數とは正定聚なり、是に隱顯あり、顯では淨土の菩薩のこと、諸上善人俱會一處なり、隱では金剛の信心を得れば現生正定聚なり、觀音勢至爲其勝友とある是なり、兩方に見らるゝ事なれど今は次下の二句に對して此土の密益と味ふべきぢや、

得至蓮華藏世界、即證眞如法性身、

此二句は五門中の第三宅門の相である、論に入第三門者、以下一心專念作願生彼、修奢摩陀寂靜三昧行故、得入蓮華藏世界故、是名入第三門とある、此文で見ると一心專念の因を以て大般涅槃を得るのであるから、因の方では第十八の信心なれ共、今は

其因の方は擧げずして只果の功德のみを擧げたるものは、因は歸入功德の處で明してあるから、此處では只果のみを擧げる、是が前に云ふ如く五因五果を一因一果に束ねる故に斯様に明したものである、
 扱、蓮華藏世界の事は勦説に長々と示してあれど、私には合點し難きゆへ、唐譯華嚴に據て左に要略を申さば、此華藏世界と云ふは、毘盧遮那如來が往昔世界海微塵數劫に菩薩の行を修する時に、一一劫中に世界海微塵數の佛に親近して、一一の佛所に世界

海微塵數の大願を淨く修めて嚴淨し玉ふ所ぢやとある、乃で普賢菩薩が大衆に告げて、諸の佛子よ、諸佛世尊の世界海の莊嚴は不可思議なり、何以故、諸の佛子よ、此華藏莊嚴世界海の一切境界は、一一皆世界海微塵數の清淨功德を以て莊嚴する所なればなりと、此の如き絶對不可思議の境界なれば、大體は是で承知すべきぢや、なれ共只絶對不可思議と計りでは何つもの名目と思ふて片附けるの恐れあれば、勦説に倣ふて今少し華藏の要領を示し置かん、

先づ此華藏世界は須彌山微塵數の風輪で持たれて居る事なるが、一番最下に平等住と云ふ風輪が有つて之を持ち、夫より一重々々の風輪が段々と其上々々を携上げて、微塵數に重なりたる最上が威光藏と云ふ風輪である、此風輪の上が普光摩尼莊嚴と云ふ大海である、其香水海に種々光明藻香幢と申す大蓮華が有つて、其蓮華の中に華藏世界があるのである、其世界は四方平均で清淨堅固なる金剛輪山が取圍んで居る、其金剛輪山には又世界海微塵數の莊嚴が備つ

てある、其大輪山の内の所有大地は皆金剛の所成で、三世一切諸佛國土の所有莊嚴で飾られてある、此大地の中に十不可説の佛刹微塵數の香水海があつて、海の底から海の岸には又无量の莊嚴がある、又一一の海に各々四天下微塵數の香水の河があつて、此河々に亦世界海微塵數の莊嚴がある、扱、此十不可説佛刹微塵數の大海中に、十不可説微塵數の世界種が安住せられてある、一一の世界種に復た不可説佛刹微塵數の世界がある、其世界の體性形狀から分齊莊

嚴が又世界海微塵數に差別してある、扱、此十不可說佛刹微塵數の大海が華藏界中に在る様子は恰も帝釋の綱の如くであるが、其最中央の大海を无邊妙華光と名づけて、其大海から一切香摩尼王莊嚴と云ふ大蓮華が出てあつて、其上に一種類の世界ありて、夫が普照十方熾然寶光明と云ふ一種類である、此一種類の中に又不可說佛刹微塵數の世界があるが、其中の一番下方の世界が最勝光徧照と名づけて淨眼離垢燈如來の淨土である、此淨土を圍んで居る世界が

一佛刹微塵數である、其上に師子光勝照佛の世界が有つて、此淨土を圍んで居る世界が二佛刹微塵數である、其上が淨光智勝幢佛の世界で、之を圍んで居る世界が三佛刹微塵數である、此の如く其上々々に世界が有つて、取り圍んで居る世界の數が一重毎に一佛刹微塵數を増して行くので、二十重迄説いてあるのが普照十方熾然寶光明の一種類丈の事である、此外の微塵數の種類がありて、一種毎に最下から最上迄又微塵數の世界ありて、皆一重一重に夫を取り

圍む世界の數が一佛刹微塵數づゝ増加する事は同じ趣きに説いてある、經文では略して百八種の香水海と世界種類の名が擧げてある、斯様に十不可説佛刹微塵數の香水海中に十不可説佛刹微塵數の世界種がありて、其世界種の一一に又不可説微塵數の世界がありて無數に差別し乍ら夫が互に連接してある、夫を悉く持て居るのが華藏界の大體であるから、實に心言路絶と云ふの外はない、是が毘盧遮那如來の證りの境界である、

扱、天親菩薩が極樂の事を蓮華藏世界と名けられた譯は蹄涔記に釋して、此は只難易の二道姑く初入の方便は其趣きを殊にすれ共、實際の證りに於ては其別なきを顯はしたもので、密藏でも華藏でも、惣べて一切の淨土は緣起無方なれば一定の相はない、衆生攝引の道無量なれば、隨處に異説したのであるから、一隅を執じてはならぬ、若し一隅を執ずると屏風の畫を眞物と誤る様なものである、佛法は假とすれば一切が皆な假ぢや、實とすれば一切皆な實ぢや、諸

法は元來假に非ず實に非ずして而も假たり而も實たるものである、今は四十八願緣起の法から（方便法身）諸佛同證の寂滅海を顯はすのであるから、同證と云ふても別願海は離れぬ、左れば唯信文意に無爲涅槃界を釋して、極樂と云ふは彼の安樂世界なり、乃至又論には蓮華藏世界と云へり、又無爲とも云へり等と、是で能く分ると私は思ふ、

即證眞如法性身とは、法性平等の證りを得る事なり、之を大般涅槃とも云ふ、略抄の偈には寂滅平等身としてある、不虛作住持の下に即見彼佛、未證淨心、菩薩が淨心の菩薩や、上地の諸菩薩と畢竟同得寂滅平等と云はれた、是が第十一願の顯益である、蓮華藏世界は眞佛土なる故に生ずれば即ち證る、假土の漸證とは違ふ。故に即證と云ふ、生じてから證るのではなく、生ずるなりすぐ證るのである、五門の上で云へば、得至蓮華は宅門にして此奥に屋門がある故、宅門から屋門へ入るに間なき事を即證と云ふ義になれ共、今は一因一果の明かし方であるから、

宅門即屋門で、二門を別に見ぬが眞土の即證ぞと顯はしたものである、

遊_二煩惱_一林_二現_三神通_一等、是は論の出第五門で還相回向の姿を頌したのである、煩惱の林とは、文軌に林とは衆多の義と、蔽日光の義と、手足に障る義を煩惱の衆多なると、佛の光明を蔽ふと、佛道修行に障るとに比例して名けた者とあり、生死の園とは苦果を受る場處なる故に草の園中に生ずる如く、生死の衆生の生ずる苦界に名づけたものなり、扱、遊ぶとは衆生の

方では邪魔になる煩惱林なれ共、菩薩の方では其煩惱林が衆生を度する好き場處ゆへに遊ぶと云ふたもの、神通を現ずとは、菩薩は無碍智に入りて衆生の煩惱に障へられぬを神通と云ふ、衆生の心中に入りて智光で照して濟度するが神通の働きなり、應化を示すと云ふは註論に觀音の普門示現の如しとありて、或は佛身をも現じ、或は種々衆生身をも現じて、隨類應同して衆生を度する事である、時に此處は一句で濟む事なるに二句あるは頌重ならずやと云ふに、

蹄涔記に釋して、此處は論文の示應化、身、廻入生死、園煩惱、林中、遊戲神通とあるを二句に綺べて造語せられたので、頌重ではない、何とならば、論の煩惱林は煩惱を有する衆生の事、生死園は三界の苦域の事で、一は依報なり一は正報なり、應化身は體にして遊戯神通は用である、夫れを今偈では上の句で應化身(有體)の用を明かし、下の句で神通用(有用)の體を明かしたのであるから、頌重にならぬと云ふてある、是で能く分るなり、扱、此二句と彼菩薩、莊嚴功

徳の中の第一第二第四の所とを照し合せて味ふべし、以上此二句が廿二願の益にして、其實は十一願の證果の働らきなれば、前の二句と此二句とで横超の一果を光闡した事を讃述し、是で天親章を結ばれたものである、

本師曇鬘梁、天子、乃至歸樂邦、

是より第三祖曇鬘大師の章なり、蹄涔記に此章を科して一に世敬を明かし、二に自行を明かし、三に化他を明かすとしてある、是で能く分る事なり、併し

初の二つは巒師の略傳なり、後の一科は其法門に就て頌したものと合點すべし、扱、巒師の傳は續高僧傳と、迦才の淨土論と、淨土往生傳とにある、彼此對照して其高德大智を慕ひ奉るがよい、巒師は北魏孝文帝承明元年、南宋後廢帝天徽四年出生、東魏孝靜帝興和四年示寂、本邦欽明天皇三年なり、本師とは、文軌に本宗の祖なるが故にと釋するに従ふべし、此始めの二句は梁の武帝が平素大師に向て崇敬歸依を拂はれた事を讚述せられたのである、又

北魏の天子が大師を崇敬せられた事は高僧和讚に述べてある、双方共に歸依された事なれ共、武帝の方が崇敬が篤かつた故に、漢文の偈には廣略共に夫を明かして、和讚には魏の天子の歸依を始めの處に明かし、結末には武帝の崇敬を述べられたるなり、梁の武帝は匹夫より起つて支那半部の天子となり、佛法を尊信し、僧侶を保護せし事は阿育王に比すべき人である、自身も佛學の達者にして著述も澤山あるが、其天子が常に巒菩薩と仰がれたのであるから、大

師の高徳は推して知るべきぢや、乃で今も最初に其事を擧げて本師曇鬘大師をば梁の天子は常に其方に向て菩薩と禮せりと述べ玉ふ事である、菩薩と禮すと云ふ記事は續高僧傳の僧達法師の傳に、帝常に顧侍臣云、北方鬘法師、達禪師は肉身の菩薩なりと、恒向北遙拜とあるなり、

三藏流支等、菩提流支は天竺の人で鬘師の時代に支那へ來つて經を譯し佛法を弘通せられた、其高徳なる事は續傳に詳かである、鬘師大集經の註解を始め

られた處が、半途で發病なされた故、姑く著述を中止して治療の末快復に成つたので、再び著述に掛らんとして不圖考へ玉ふ様、人命は不定也、世に長生の方術ありて長壽の人も往々ある事なれば、夫を學んで成功の上に佛法を修行せば善からうと、兼ねて梁國の陶隱居が其術の達人なるを聞及ばれてある處から、魏の國より梁國へ渡り、先づ武帝に面謁して許可を求められた、當時は戰國なる故、敵國の者が自由に徘徊する事は出來ぬから斯様にせられた、此時武帝

は高座を設けて大師を待受けられ、大師高座に昇りて四論佛性の義を演説ありしに、武帝は僧服を着けて聽聞せられたとある、扱、翌日再度面謁の時に仙術を陶隱居に學び度旨を申述べ、帝より認可を得て陶隱居に面會し、仙經を授かりて歸路、洛陽に於て流支三藏に逢ふて佛教中にも長生の術ありやと問はれしに、三藏地に唾して此界に長生なき事を告げ、眞の長生を得んとならば之を讀むべしとて觀經を授けられて、立處に仙經を焚き棄て、夫より他力門に入ら

れたと云ふ事なるが、此巒師の授かりたる書に就ては古來論のある事で、本傳并に諸註の多くは觀經と云ふ説なれど、法霖師は大經ならんと云ひ、僧樸師は矢張り觀經を流支より受けて其後大經を讀まれたものと云ふ、是は巒師の法義は道綽善導以下と違ふて、大經を土臺とした法義であるから、霖師は大經なるべしと想像し、樸師は又觀經と云ふは古來の説なる故に夫を用ひて、最初觀經を讀みて亦説法藏比丘四十八願等の文がある處から大經を讀まれたものと

想像したのである、此外寶雲師は淨土論を授かつたと東大寺の藏書を引いて主張して居る、愚も最初は之に同じたれ共、其後廓録を見るに、巒師が流支に面會なされたのは五十二才の時で梁の大通元年なり、淨土論翻譯は夫より二年後で梁の中大通元年なる故に、年時が合はぬ事を知つたから姑く本傳等の説に従ふ事とした、兎に角此二句は巒師が他力門に入られた歴史を略して讚述なされたのである、

天親菩薩論註解、

論註製作は巒師五十四才以後の事なれば、大抵六十才前後の著述なる事は明かなり、晩年の著述と云ひ、殊に龍樹の易行品に基いて本論の深義を發揮し、他力回向の宗教を明かにして後代の爲めに明燈を貽されたるものにして、大師一世の大事業にして其功論主に劣らずと云ふて可也ぢや、因て今偈に大師の自行化他を頌するに此註論の法義を讚するを眼目とせらるるのである、

報土、因果顯誓願等、

此の以下註論一部の法門の要處を掲げて論旨發揮の功を次第して讚述するに、先づ初の二句は註の利行満足章の速得成就阿耨菩提の問答の釋意を二句綺べて述べられたものである、報土の因果誓願なる事を顯はすと云ふは、彼章に凡是生_レ彼淨土_一と、及彼菩薩人天の起す所の諸行は皆緣_レ阿彌陀如來_一本願力_一故也、何以言_レ之、若非_レ佛力_一四十八願便是徒設、今的_レ取三願_一用證_レ義意_一と云ふて、夫より十八願を擧げて往生の因が誓願を増上緣とする事を明かし、十一と廿二

願を擧げて往生の果が又誓願を増上緣とする事を明かされたるは、實に論主の密意を發揮せられた肝要であるから、初の一句に之を讚したものの、爾れば報土の因果とは凡夫を速かに往生成佛させる所の彌陀の報土は、因果共に誓願の力にして凡夫の力に非ずと云ふ事を顯はされたるぞと云ふ意である、因みに報土の二字は議は巒師に在て名は道綽善導に在り、後の名を用ひて巒師の法義を述べたもの、此顯の字は下の句にも掛るなり、

次に往還回向他力に由るとは論文の上では五因五果の法門を示して、五念門の因を以て入出の五果を成就する事を示し、之を結ぶに菩薩如_レ是修_二五念門_一、行_一、自利々他、速得_レ成_二就阿耨菩提_一と云ふてある、故に往相還相二種の回向は兎角衆生の仕事の様に思はれる、夫では凡夫の往生は絶念である、然るに論主の本意は決して左様でない、三種成就、願心莊嚴とあるからは往還の回向は凡夫の自力でなく、如來の他力から成就するので无くてはならぬ、左なくては普

共_二諸衆生往_二生安樂國_一と云はれぬと、論主の密意を採つて他力回向を顯はされたる巒師の御骨折りを述べられたのであつて、是れも同じき利行満足章の次上の文に有_二何因縁_一言_二速得_レ成_二就阿耨菩提_一と問ふて、其答に、論に五念門の行を修め以て自利々他成就するが故にと言へり、然るに覈_二求其本_一、阿彌陀如來爲_二増上縁_一と云ふて夫より他利と利他との言の左右を示して、令諸衆生、功德成就の佛から言ふ時は利他なれ共、乘佛願力の衆生から云ふ時は他利と

云ふべき筈なりと、往還回向の成就するは全く如來利他の願力に由る事ぞと發揮されたるを、斯くは讚述せられたのである、左れば證卷の終りにも宗師顯示大悲往還回向、慇懃弘宣他利利他深義と云ひ、二門偈にも當知今將談佛力、乃至は入出二門名他力とあり、此句と照して味ふべし、乃で此二句は天親章の遊煩惱林の二句の如く、一つの法門を二句に綺べて讚嘆したもので、前の一句は土體に約して述べ、後の句は回向の用に約して讚嘆したものと要

訣にも申してある、私も左様に味ふ事なり、

正定之因唯信心とは、上に已に報土の因果共に誓願の所成なる事を顯はし、往還の回向は全く他力に由る事を顯はしたれば、其報土の生因は只如來の回向を領受する計りである、其領受する事を信心と名づける、之を辯師は信佛因縁と示されたから、此處で夫を述べたものである、此の下は五部評では上に往還回向由他力と辯じ置き、是より即涅槃迄の三句は往相を示し、必至无量の二句は還相を示す、初の

中に正定の一句は往相の生因を示すなりと釋してある、是で能く分るなり、此句は註の上卷に易行道者、謂、但以信佛、因緣、願生淨土、乘佛願力、便得往生彼清淨佛土、佛力住持、卽入大乘正定之聚、正定卽是阿毗跋致等とある文に基いて造語せられたのである、扱、正定に二つありて、一には現生の益なり、善導の蒙光觸者心不退と云へるものにして、祖師之を正定聚と稱せらる、一家の常談なり、二には當來の益なり、上に引く註文の如し、是

れは廣門に約する時淨土の證りを正定聚と云ふのである、今此處では論註の文に據て述べられるのであるから淨土の證りとあるが當然であると要解、刊定、勸說等皆左様に見てある、併し私の味ふ處では正定は現益と見ても仔細なし、何とならば斯處の論註の文は本と易行品の釋を述べられるのであるから、龍樹の釋が現益としてある故に巒師は夫を當益にして述べられたれど、本論が現益にしてあれば今偈で現益の意に讚述せられても仔細はない事である、乃で

文軌には信卷信樂、釋にも斯、心者即如來大悲心、故、
 必成報土正定之因」とある文を引いて、祖師の意は
 矢張り淨土の正定聚と云ふ事ではなく、此土の密益の
 意で述べられたものと見たるは至極適當と私は味は
 される、乍去之を淨土の正定聚と見るは祖意に背く
 との説は餘り過ぎたる云ひ様なり、巒師が已に淨土
 の正定聚として述べられたのであるから、夫を其儘
 に取るも仔細はなき事である、詮ずる所ろ兩様共に
 不都合なき見様である、唯信心とは信心の外に別物

なしと云ふ事なり、巒師は但の字を用ひられたるを
 今は唯の字にせられた、唯も但も共に餘を簡ぶの言
 と判定に釋する通りなれば同じ意である、元來他力
 大信の一因を以て无上涅槃の一果を得ると云ふが論
 主の極意なる事は建章四句に見へたる故に、巒師が
 此義を發揮せん爲めに一論註解の端緒を開くに、龍
 祖の信方便の易行を以て疾く阿惟越地に至るの文を
 引出して之を祖述せられたるは、二大士相承の眼目
 を示されたのであるから、今も此一句を以て一心の

外に往相の生因なしと云ふが、巒師の相承ぞと知らせたものである。因みに此一段は祖師が巒師の法義を咀嚼して讚述せらるゝのであるから、只論註の文相の儘を紹介なさるのでなく、其深意を探つて讚述せられると云ふ事を合點して味はゝねばならぬ、此一段のみならず、正信偈一部全體が都べて經論釋の深義を已證の法門として述べられたものと云ふ事を忘れてはならぬ、

惑染凡夫信心發、乃至卽涅槃、

此二句は上に正定の因は只佛願他力に歸入する信心一つぞと顯はしたるを承けて、其歸入する人柄を擧げて徳益の廣大なるを示さんとするに、最下の機根を擧げて大悲攝化の正意を示し、圓頓一乗の法益を顯はしたものである。此惑染凡夫の句を略鈔の偈では二句に開いて煩惱成就凡夫人、信心開發卽獲忍と云ふてある、今偈は只一句で卽獲忍の得益は略して直に證知生死の句に成つてある、双方對照して味ふて見るも面白き事である、

扱、惑染とは勦説に惑は煩惱の義で、事理の諸法に迷惑して了解せぬ事で、唯識論には發業潤生の煩惱を惑と名くとある、染は染汚と熟して矢張り煩惱の異名にして、心性を穢濁するから名けたものと云ふてある、信心發とは一念發起に就て上の唯の言を顯はしたものと要訣に云ふが如し、又勦説に内因佛願、外縁師教、惑染心中、能生淨信と云ふて、論の開諸衆生淤泥華とあるを巒師維摩經の高原陸地、不生蓮華、卑濕淤泥、乃生蓮華の文を引いて、此

喻凡夫在煩惱泥中、爲菩薩等開導、能生佛正覺華、とある註文を引證し、善導の衆生貪瞋煩惱中、能生清淨願往生心の義ぢやと云ふてある、

證知生死即涅槃の句は、證知の二字を狹義に取れば大覺證悟の事にして淨土眞實の證果となり、又廣義に解すれば信解の事にも通じて、此土の密益にも取られる、故に古來二様に見てある、樸師云く、現益と見る時は、生死の凡夫乍ら彼土に生じては生死即无生の身と知つて喜ぶ事とも見へ、又當益とする時は、大

慈大悲報土の證りと見へる、何れに見ても妨げなしと、兎角佛祖の言句は斯様に打ちくつろぎて味ふが難有き事である、六要にも現益と味は、れて問答を設けて、凡夫が直ちに此法を證ると云ふに非ざれ共、今の名號は萬徳の所歸なれば、佛果の功德にして能信の信心又他力より起る、更に凡夫自力の心行で無い、夫故に信を發し名號を稱すれば、不斷煩惱の惡機乍ら法の功德に依て此理を備ふるのぢやと釋してある、

扱、生死卽涅槃の五字は論註に出てある、即ち下卷に佛所得の无上正遍道を釋して、道とは无碍道也、經に曰く、十方无碍人、一道出生死と、一道者无碍道也、无碍者謂知生死卽是涅槃、如是入不二法門、无碍相也とありて、如來の證智を示したのであるから往相證果の相である、今不斷煩惱の凡夫が一念の信に由て自然に此理を備ふる事は、只法徳の不思議と感戴するの外はない、
必至無量光明土、乃至皆普化、

此二句は還相の利益を述べるのであるが、初句は平等覺經の文を採つて造語せられたもので、下の句を起さん爲に上の一句を持出したる心持ぢやと要訣に解してある、如何にも左様に見へる、往相の體に大悲を具して夫が活動する外に還相と云ふものはないのであるから、其趣きを顯はされたが此二句である、

扱、必至とは必に自然の義と決定の義と二つある、是は上の信心發を承けて來たので、決定して无量光明土に至ると見れば、一心の佛因に由て必ず佛果に至るの義と味は、れ、又上の證知生死を受けたとすれば、正定聚に住するが故に必ず滅度に至るの義と味は、れ、此時は自然の義に成る、二義共に存して可なりぢや、乃で无量光明土の五字は覺經の速疾に超へて便ち安樂國の世界に到るべし、至、无量光明土、供養无數、佛とある偈文から採用したものなれど、其義は論の究竟如虛空、廣大无边際の文、及び註の盡十方无碍光の釋に、若言一佛主領三千大千世界、

是聲聞論、說也、若了諸佛徧領十方无量无邊世界、是大乘論中、說也の釋に基いたものと五部評に云ふ通りである、然るに此无量光明土と云ふが覺經では諸佛の國土として説いてある、夫を祖師では眞土卷に彌陀の報土と明言せられて一家の常談である、此相違を註に段々會通してある事なるが、是は上に云ふ究竟如「虚空」の偈文、及び巒師盡十方の釋を玩味したら別に仔細なき事である、何となれば諸佛の土も光明土なり、彌陀の土も光明土なり、共に光明土な

れ共今は彌陀別願所成の光明土なる故に、此點より云はゞ諸佛の光明土は皆彌陀光明土中の物であるから、諸佛の土を全ふして一彌陀の土である、一彌陀の土にして又諸佛の光明土たる事を妨げず、是が大乗論中の味はい方なれば別に六ヶ敷はないのである、乃で今此必至无量光明土とあるを必至滅度の事とすれば之を彌陀の報土と見てよし、此二句共に還相の利益を述べたものとする時は、此の无量光明土を諸佛の國と見るもよし、其時は无量の光明土に至

ると讀みて、數限りもなき他の淨土を廻つて諸佛を供養する事と見る、是は廣門示現の上で、淨土の菩薩の事業は佛を供養し、衆生を度するの二つよりなき事、廿二願及び論の四種正修行の第二第三第四に見へてある、由つて此二句を其事として味ふもよしと要訣に釋してある、畢竟の處不可思議の妙境界なれば、差別即平等の故に、諸佛の土を攝して一彌陀の土なり、平等即差別の故に彌陀の土にして即諸佛の土なり、諸有衆生は種類非一を諸と云ひ、因果不亡を

有と云ふ、三界の衆生の事である、皆普化とは其相は天親章に云へる游煩惱林の二句の如しと知るべきなり、

道綽決_ニ聖道_ノ難_ニ證_等二句、

是より第四祖道綽禪師の章である、禪師の傳記は續高僧傳の廿四卷、迦才淨土論下、瑞應傳等にあり、今要略を擧げば、師は隋唐二朝に跨りて化導せられた人である、師は并州の人にして州の玄忠寺にて曇巒師の碑文を見て涅槃宗を改めて淨土門に入り、玄忠寺

に於て觀經を講ずる事二百遍に及ぶ、并州、大原、碧陽、三縣の人民七才以上の者皆念佛を信じたとある、自ら數珠を製して人に與へて念佛を勧められた、師は常に笑を含んで人に接せられた故に、接する者自然に其徳を感じたとある、又行住坐臥西方を背にせられなんだとある、師或る時善導大師に入定して往生の得否を佛に問ひ奉らん事を請はれた、善導入定して佛を見奉りて申さるゝ様は、道綽現に念佛三昧を修行せり往生を得べきや否やと、又往生の入年月を

も問ひ奉れば、佛の仰せに樹を伐るは連りに斧を下せよ、無縁には共に語る事莫れ、家に還るには苦を辭する事莫れと、又宣はく、道綽には三罪を懺悔せしめよ、一者、經像を入口に安置して自身に房中に安置せり、佛に對して懺悔せよ、二者、功德を作すに出家人を使命す、十方の僧に懺悔すべし、三者、修膳建築に由て有情を損傷す、一切衆生に對して懺悔すべしと、又問ふ終る日に何の瑞相ありて人をして見聞せしむるや、佛宣はく、亡日には我れ白毫光を放つ

て遠く西方を照さん、此光り現ずる時來_ニ生我國_一と、果して亡日に三道の白光ありて房内を照し、又巒師光明を放ちて七寶池中に在りて告げて曰く、淨土已に成りて餘報未_レ盡、紫雲境上に三度現ぜりと云々、扱、此二句に就て二重の意がある、一者、聖淨二門の名は大師の糺むる所にして、大師の教判とも申すべき事業である、此前には龍樹二道を判じ、巒師之を承けて自他二力の名を立て、難易の實を證明せられた、爾るに二道二力にては法門の區分修行の差別未だ畫

一せざる所あり、大師に至りて二門の判を設けて全然趣入の門戸を分ち、行者をして岐路に迷ふの疑惑無からしめたるは大師一代の偉業である、後來元祖の立教開宗は全く大師を模範とせられし事選擇集二門章に明かである、故に今は其功を表章せん爲に首として此二句を掲げられたものである、即ち安樂集上卷に、一切衆生の火宅を出でざる事は二種の勝法を得て生死を排はざるに由る、何者爲_ニ一、一謂_ニ聖道_一、二謂_ニ往生淨土_一、其聖道一種今時難_レ證、一由_下去_ニ大

聖_一遙遠_上、二由_三理深解微_一と云ふて、月藏經の我末法時中乃至可_三通入_一路の文を引證せられたのが夫である、決とは判決なり、唯明とは淨土の可_三通入_一路を明かすと共に、是故大經に云くと第十八願取意の文を擧げて可通入の明證とせられたり、以上一重なり、二には天台、慈恩、嘉祥等も矢張り聖淨二門を立て乍ら、未だ聖道を捨てずして二道並び説いて居る、夫故聖道の難證なる事猶ほ未決たるに似たり、大師は自身に斷然聖道を捨離して、自行化他専ら淨土

の一門を緯とせられたる事他の諸師と全く別なり、故に此二句を以て大師の特色を表章したものと味ふ、此時は決は決斷の義なり、聖道の難證を決斷して、身を淨土門に投じて自行化他し玉へりとの意に成る、乃で唯明の二字も只理由を説き經文を引いて明かしたのでなく、實賤躬行上で専ら淨土の可通入を明示されたと云ふ義になる、以上が第二重なり、此二重の意舊註分明ならず故に愚見を加へ置く、聖道淨土の名義は化土卷の本に、於_三此界中_一、入_レ聖得_レ果、

名_ニ聖道門_一、云_ニ難行道_一、乃至、於_ニ安養淨刹_一、入_レ聖證_レ果、
 名_ニ淨土門_一、云_ニ易行道_一と釋してある、難易二道は
 行に就て判したるもの、聖淨二門は證に就て立てたる
 名目である、聖道とは聖人所行の道と云ふ時は道は
 因道である、又聖人所得の道と云ふ時は道は果にし
 て證りの事になる、聖即道なり、此二義で聖道を解
 すべし、淨土門は具さには往生淨土門である、淨土
 即涅槃なる故に證りの門と云ふ事、門は能通の義な
 り、以上五部評に見ゆ、扱、此道綽章は二句宛に次

第して教行信證の四法になつてあると勸説に注意せ
 り、如何にも其通りに味はゝれる、夫で此最初の二
 句は教の卷になるのである、

萬善、自力_ニ勤修_一、圓滿、德號_ニ專稱_一、

此二句は眞實行である、前の二句と同様で初の句に
 て自力の行を貶しめ、後の句は他力の行を勧められ
 た事を頌する、萬善の自力とは自力の萬善と云ふも
 同じ意である、勸説に萬善は福慧の衆行、自力は諸
 機の策勵と釋してある、

上文已に聖淨二門を分けて淨土の一教を指示したれば、今度は淨土門中に於て諸善萬行を勤むる事を貶して専ら他力の大行を勧められるのである、縦令五種の正行たり共、機の功を用ゆる時は矢張り萬善の部類になると知るべし、貶の字は腐敗と對待すれば褒の裏である、字書に抑なりと註す、又貶斥とも熟して兎角抑へおとしめる義である、

扱、此二句の本據を安樂集で求めるには、始終兩益の釋が夫である事は刊定、文軌、蹄泔等皆一致である、

即ち集の下卷第四大門の第二章に、諸經に多く念佛三昧を宗とする事を明かすの下に、第四番に觀經及び餘の諸部に依るに、所修の萬行、但能廻願莫不皆生、然念佛一行將爲要路と云ふて、夫より念佛の行には始終の兩益ある事を明かされた、始益と云ふは觀經に説く所の念佛の衆生を攝取不捨、命終して必ず彼國に往生する事である、終益とは觀音授記經を引いて、餘行の者は淨土で佛の滅度を視れ共、一向專念の行者は彌陀の常住を見る事を明かしてある、此

釋が實に大師貶勸の明文と云ふべきぢや、尙此外集中に或は涅槃經を引いて、佛が大王に向て、假ひ大庫藏を開き一ヶ月中一切衆生に布施して得る所の功德よりも、稱佛一口の功德は之に過ぎたる事不可校量とあり、又増一阿含經に、衆生ありて一閻浮提の人に衣服飲食臥具湯藥を供養して得る所の功德多しとせんやとの玉へば、阿難が甚多不可數量なりと答へたれば、佛の玉ふ、若し衆生有て善心相續、稱佛名號、如_下一構_上牛乳_上頃、所得功德、過_上無_上有_上能量者_上との

の文を引いてある、是等皆な此二句の據りどころなりと蹄涔に見ゆ、難有き解釋と云ふべし、

三不三信、誨慤勸、乃至同悲引、

此二句は大信を明かす所にして、信不の勸誡を懇ろにして像末法滅の衆生を悲引せられたる事を頌したのである、扱、三不三信の事は論註に不如實修行を釋して辯師が示されたる法門なるが、大師彼文を安樂集に取意して更に其義を丁寧にせられたのである、辯師の釋は三不の方を示す事に辭を重ねて、三信

の方は只之と相違するを、如實修行と名くと斷りてある、乃で大師は更に三信の方に辭を加へて、若能相續、則是一心、但能一心、卽是淳心、具此三心、若不_レ生者、無_レ有_二是處_一と丁寧に釋せられた事である、扱、誨慇懃と云ふに附て霖師は二義を以て解してある、一には巒師が先きに此旨を明したるを今亦た取意して教誨されたるは、丁重の至りであるから慇懃と云ふたもの、二には安樂集一部に專稱を勧める文多ければ、名義相應と否との沙汰に及ばず、依て此處に於

て其義を丁重にせられた處を誨慇懃と讚述したるものと云ふてある、私も左様に存することなり、

像末法滅同悲引とは蹄涔に委しく註せり、巒師已に五濁世に就て難易二道を釋すと雖も、經を引いて三時の次第を示す事は大師に至つて始めて明かなり、是れ像末法滅の機類を悲引せんが爲めである、安樂集に當今時衆生、卽當_二佛去_一、世後第四五百年、正是懺悔修_レ福、應_レ稱_二佛號_一時者也、又曰く、當今末法、是五濁惡世、唯有_二淨土一門_一、可_二通入_一路、又曰く、釋迦牟尼

佛一代、正法五百年、像法千年、末法萬年、衆生咸盡、諸經悉滅、如來悲_レ哀痛燒衆生、特留_レ此經、止住百年、是等の文何れも法の時機に應ずる事を明かす、大師時運に乗じて要法を弘通せられたる故に、像末法滅と云ふたもの、同悲引とは像末法滅を同一に悲愍し引導されたと見る義と、上の句に掛けて三不三信の論を愍慙にして、辯師と同じく像末法滅を悲引せられたと見る義と兩様の意を含めたものと味は、れる、一生造_レ惡値_レ弘誓、至_レ安養界證_レ妙果、

此二句は證の卷に當る、安樂集の上卷に、是故大經に云くと第十八願を取意して、若有_レ衆生、縱令一生造_レ惡、臨_レ命終時、十念相續、稱_レ我名字、若不_レ生者、不_レ取_レ正覺と示し、又縱使一形造_レ惡、但能繫_レ意、專精常能念佛、諸障自然消除、定得_レ往生と示されたるが初めの句の本據である、和讃に、一形惡を造れ共の二首が全く此處を讚述せられたものである、妙果を證ると云ふは、集の上に又問て曰く、如_レ上所言、知_レ生无生、當_レ上品生者、若爾下品生、人(一生造_レ惡機)乘_レ十念_レ往生

者、豈非取實生也、若實生者即墮二疑、一恐不得往生、二謂此相善、不能與無生爲因也、答て曰く、釋有三番、乃至三亦如氷上燃火、火猛則氷液、氷液則火滅、彼下品往生人、雖不知法性无生、但以稱佛名力（弘誓）、作往生意、願生彼土、既至無生界時、見生之火自然（願力不思議）而滅也、（火滅處即無生妙果）、又集の下に據大經云く、十方人天但生彼國者、莫不皆獲重々利益也、乃至形則身同金色、壽則命與佛齊、乃至遊則上八正之路、至則到

大涅槃、一切衆生但生彼國者皆證此益（果）、是等の文が次句の本據であると蹄涔に見ゆ、是にてよく分るなり、

善導章、

宗祖の聖典中には巒師を稱するに大祖を以てし、善導を稱するに高祖を以てせらる、是れ他の五師と特異を表せられたる者と云はねばならぬ、

（行卷偈前の文）（二卷鈔）

大師の傳は續高僧傳遺身篇、瑞應傳、新修往生傳、

金佛鏡、龍舒淨土文、佛祖統記等に出づ、但し此に異說種々ありて、第一に、長安臨淄生地の異、第二に、投身掩室臨終の異、第三に、十四日と廿七日と忌日の異、此三點を著大なる者とす、勦說に諸傳を折衷して略記してある、姑く之に従ふべし、

善導、姓は朱氏臨淄の人なり、幼にして出家せり、時に西方の變相を見て深く欣心を生じ、因て修行の法を求め、大藏中に入りて手に任せて卷を探るに觀經を得たり、大きに喜んで誦習し、十六觀に於て恒に

諦かに思惟せり、後ち晋陽に往き綽師の觀經を講ずるに遇ひ、大きに歎じて曰く、是れ眞に入佛の要津なり、餘は迂僻にして成じ難しと、愈々篤く勤修する事頭燃を救ふが如し、京師に行化するに歸するもの市の如し、或時は念佛の利益を證誠せん爲に、自ら彌陀佛を念ずる事一聲すれば、一道の光明ありて其口より出づ、十聲百聲千聲に至るも亦た是の如しと云ふ、後ち往生の期至るを知り、所住の寺院中に於て急に摧ふして淨土の變相を寫し了り、忽然と微疾

を示し室を掩ふて逝けり、春秋六十有九、異香天樂西に向つて隠れたり、時に唐の永隆二年三月廿七日なり、高宗皇帝其行徳の高きを知りて寺額を光明と賜ふ、爾るに諸傳中に、敏中郎新修往生傳、及び志磐の佛祖統紀には、長安臨淄の二師を列ねて別人とせり、此に由て舊來各々多義を設けて同異を論ぜり、左れ共二句の外諸餘の僧史にば並に一傳として別人を標せず、若し果して同名異體の人あらば、曆代の明哲何ぞ之を脱漏せんや、且又異説を確執して必ず別人と

せんか、則ち一傳中に亦た同事の異説あるを奈何がするや、例せば臨淄傳に蓮華の萎むや否やを以て往生の得否を占ふ事を以て、或は善導師が問ふて道綽師が答へたりと記し、或は他人が問ふて善導師が答へたと記せり、又長安傳に捨身の事を記して、一には柳樹より投身自絶と云ひ、一には樹上に立化すと云へり、又光明寺號の如きも、一には師の在世の號とし、一には没後の勅賜に依るとせり、同一事の上に於てすら尙ほ異説あり、又捨命の事の如き南山師の説に

依れば、或る信徒の事にして大師の事に非ずと、斯様に一事を以て或は師の事とし、或は弟子の事とすれば、必ずしも一偏に封執す可らず、是等の傳聞異詞ある事は他の高僧傳にも其例少からず、今時近隣の事跡すらも見聞の上に異説あるは比々として皆是れなり、元祖の意已に別人ありと認めざるは和語燈に明かなり、有智者惑ふ事なかれ、善導獨明_二佛正意_一等二句、

此より第五祖修南大師の章である、三朝七祖番々出世して、彌陀本願の一宗を興行せらるゝ事は同一なりと雖も、其功烈に於ては等差なきに非ず、龍天二大士は姑く之を置き、以下五祖の中に就て、宗祖の聖教中繼師を目するに大祖を以てし、善導を呼ぶに宗師を以てして之を推尊せらるゝ事他に異なり、是れ何故ぞと云はゞ、他力の宗脈を傳持する點に於ては諸祖同一なれ共、一宗擴張の功烈を云ふ時は曇巹善導二師は殊に盛んである、其旨廣略二書及び二卷鈔等を見て可知なり、

扱、獨明佛正意とは、大師の時代に方て天臺、嘉祥、攝論の學師等各々本宗の眼孔を以て觀經を解釋し、彌陀の願意に暗く、釋尊の教旨を謬り、本爲凡夫の佛說、他力別異の法門全く閉塞せられて、下機の往生望み絶へなんとす、此時に於て大師世に出で、道綽師の法統を受け、上は二尊の悲懷を發揮し、下は衆生の出要を顯示し、外は別解別行の謬見を排かんが爲めに、十方諸佛に證を請ふて觀經疏四卷を製作し、古今を楷定して二尊の正意を世に紹介せられたるは、

古今無比の大事業にして、先哲の所謂る、前に古人なく後に來者无しとは決して過讚ではない、和讚に云く、大心海より化してこそ乃至十方諸佛に證を請ふと、今の一句と相照して其功業の偉大なるを味ふべきである、然れば、獨明佛正意とは、他の諸祖が佛の正意に暗くて大師のみが佛意を明かにしたと云ふ義ではなく、他の別解別行の誤りを辯じて、佛の正意を明かにする事に力を盡されたと云ふ意味である、七祖何れも二尊の正意を明かにせられた事は、上に

已に顯大聖興等と讚してあれば先論の事なれ共、佛證を請ふて別解別行の謬説を排ひらき、二尊の正意を示して定散逆惡の往生の大路を開かれたるは今師の特色なれば、之を獨明佛正意と嘆美せられた事と味あふべきである、尤も此句は次の句と一連にして味あふを宜しとす、

扱、佛の正意と云ふに就て、舊註に或は三佛の正意とし、或は二尊の正意と云ふ、樸師は十方諸佛に證を請はれた故に三佛と見るもよし、別しては彌陀釋迦二

尊、兼ては三佛なりと云へり、之に従ふべし、扱、其正意とは、法體に就ては彌陀別異の弘願を擧げて、善惡凡夫得生の増上縁たる事を顯はし、機に就ては、定散諸機各別自力の心行を捨て、他力金剛の信心を本とすべき事を顯はしたるが夫である、束ねて云はゞ、彌陀別異の弘願と釋迦廢立の教旨とに外ならず、諸師が迷惑せしは此二つを誤認せしに過ぎず、大師の獨明せしは此二點を獨明したのである、經疏中に就て要點を擧げば、一に九品の機類を辯じて本爲凡夫

の佛意を明かにせられたる事（玄義）、攝論の説を會して下品の念佛に願行具足する事を明かにされし事（同上）、念佛と定散の得失を辯じて二行廢立の佛意を明かにされし事（定散義）、二種の深信を建立して九品の往生を決せられし事（散善）、二河の譬喩を設けて二尊遣喚の正意を明かにされし事（同上）、抑攝二門を辯じて惡機の回心皆往を決せられし事（同上）等にて、束ぬれば、彌陀弘願の正意と釋迦廢立の教旨とに收まると知るべし、

矜_三哀定散與_三逆惡_一とは、矜_三哀の二字は矜_三哀三界の經文に本づく、矜は憐なり哀は愍なり、憐愍と同意である、定散と逆惡とは觀經一部に現はれたる機類を殘らず擧げたもの、即ち定善の機は十三觀に堪ゆる善機なり、散善の機は三福九品の機にして、此中上六品は善機なり、下三品は無善造惡の機であるから、之を逆惡と名けたもの、扱、大師が二尊の正意を明かにされたるは、畢竟此定散と逆惡との一切凡夫を憐愍せられたからである、換言せば、大師が二尊の正意を明

かにして、定散逆惡の凡夫をして弘願の信心に本づき、報土往生の大果を得せしむるが憐愍の事實である、扱、矜哀の所由に就て、要訣文軌等の見と、蹄涔の意見とが二様である、涪記の意では、觀經の定散逆惡を諸師皆な取違へて、定散二善は方便なる事を知らず、弘願他力は正意なるを知らず、或は五逆罪を滅するは觀念で滅すと云ひ、或は三福で滅すと云ひて往生の道を迷亂する故に、大師之を悲んで佛證を請ふて佛意を明かにせられたと見る、又文軌の意では、定

散を哀むは、一には、二善は非本願にして眞因でなき故に、二には、自力の善は成就し難き故に之を憐むと見る、又下三品の念佛は雜修なる故に是も報土の眞因に非らず、故に滅罪に限りあり開華に遲速あり、是れ全く機の失なる故に、之を引上げて本願の大智海に開入させんとあるが矜哀なりと見る、樸師は此兩様共に可なりと評してある、今も之に同ず、時に此章の八句が二句宛組合せて次へくと連屬して味ふ様に出來てある、善導獨り佛の正意を明かにして定

散と逆惡とを矜哀し玉ひ、光明名號の因縁を顯はして本願の大智海に開入せしむと、斯様に次々へ續く文句の造り方なり、又略鈔偈の本章と今偈とは少し趣きを異にす、彼方は、善導獨り佛の正意を明かにし、深く本願に藉て眞宗を興すとありて、次に定散と逆惡とを矜哀して、光明名號の因縁を示し玉へりと、斯様に二句宛で組合されてある、此邊を合點して味は、ねばならぬ事である、

光明名號顯因縁、開入本願、大智海、

是より以下は大師が定散逆惡を矜哀せられたる相たを要を取つて讚述したのである、

此二句の據るは、禮讚に專修雜修の得失を明すに就て、始めに文珠般若を引いて一行三昧の利益を示し、次に觀經にて佛が坐觀禮念等を勸むるに、餘の九方に簡んで専ら西方を嘆じ玉ふを示すに附て、更に一層の問答を設けられた、問の意は一切諸佛は同じ證りの境界なれば、智慧慈悲も同一であるふ、左れば何れの方に向ふて何れの佛を稱念しても往生は

得らるべきに、佛が觀經に於て偏に西方を嘆じて専ら禮念を勧め玉ふは如何なる義ぞとの不審である、是が定散自力の人の氣分で問を設けたのである、扱、其答へに、諸佛の所證は平等是一なれ共、若し願行を以て來收するに因縁なきに非らず、然るに彌陀世尊は本と深重の誓願を發し、光明名號を以て十方を攝化して、但だ信心を以て求念すれば、上盡一形下至十聲一聲等まで、佛の願力を以て往生を得易からしめ玉ふ、是故に釋迦諸佛西方に向ふの別異たる

事を勧むる耳と、此答への意は、果上の證りは無論佛々平等無差別なれ共、因位の願行を以て結歸する時は、佛々の攝化に因縁差別ありて平等是一ではない、釋迦の五百願、藥師の十二願等、皆平等證中の別相なり、其別相中に彌陀は殊に他力救濟てふ深重の誓願を發して、其願成就して光明名號を以て十方を攝化し玉ふ佛であるから、彼の誓願力に乗托すれば、修行の如何に拘らず佛願力の自然で往生が出来る、夫故に釋迦諸佛が別途として西方に向ふ事を勸

め玉ふぞと、此義を定散の人に示して、本願の大智海に開入せしむるが大師の功勞なる故に、光明名號顯因縁と云ふたもの、

左れば此文に因縁と名けたるは、佛々攝化の差別ある事を指したもので、祖釋に所謂る光號因縁の處迄は釋意が進んでは居らぬ、光號因縁は、祖師が大師の此釋に本づいて、更に又深妙の義を發揮せられたものである、夫故古來の釋家往々に此處を行卷の光號因縁を以て解すれ共、夫は餘り立越へた解釋であ

るから、蹄涔には二義を列ねて、第一義には、古來の說を擧げ、第二義には、自己の意見を述べて愚が右に云へる如く斷つてある、尤も六要にも此二句を釋して、光明等とは上に引く所の禮讚前序の釋の意なりと簡單に釋してあれば、蹄涔の第二義は六要の見に本づきたるものと見へる、

扱、此大師の釋を本として、光號攝化の趣きを更に發展したのが行卷の光號因縁兩重の釋であるから、序に兩重因縁の大要を申さば、初めに德號の慈父无れ

ば能生の因缺けなん、光明の悲母无れば所生の縁乖
 きなんとあるが一重にして、是は名號は父なり、父は
 必ず子を生ずべき者なれど、母と和合せねば子を
 生ぜぬ如く、名號は必ず信を生むべき者なれ共、光明と
 和合せねば信を生ぜぬ、夫故に德號は信心が爲めの
 生因、光明は信心が爲の生縁と顯はしたものである、
 扱、次に、能所の因縁和合すべしと雖も、非信心業識、
 無_レ到_二无量光明土_一、眞實信業識、是則爲_二内因_一、光明
 名號父母、是則爲_二外縁_一、内外因縁和合して報土の

眞身を證得すとあるが第二重なり、名號と光明との
 能所(父母)の因縁は和合しても、信心の業識でなくて
 は光明土には至らぬ、乃で名號の因から信心を生み
 出す時が、丁度子が胎内に宿る所である、宿つて見れ
 ば父母は最早や外縁の位に成つて、托胎したる信心
 の業識夫れ自身が因の位となり、月満ちて生るゝ所
 を淨土の證りに喩へたものである、然れば光號因縁
 和合して業識の信心を生ず、是の時早く名號光明は
 外縁と變ず、されど信心の内因が其體名號にして、恰

も父の精血が子の骨に成る如くである、又名義相應の信なる故に、正しく生るゝ時は光明から生れる、恰も母の精血が子の肉となる如し、爾れば光明名號が信心となる事、丁度父母の精血が子の骨肉となる様なものと、以上五部評の説がよく分るゆへに茲に紹介し置くなり、此兩重因縁は第一重は大法鼓經に依り、第二重は探玄記に依つたものと蹄涔に釋してある、開入本願、大智海とは、開入は開導歸入の義と要訣に釋するに従ふべし、本願の大智海とは、上文に本

願大悲智慧眞實恒沙萬徳の大寶海水とあり、今は字數に限りあるゆへ略して五字につゞめたもの、絶對佛智の本願名號を指したものなり、光明名號の別因縁を顯はして、定散諸機の輩を選擇の願海へ開示悟入せしめられたりと讃述したものなり、勦説には此句を承上起下と見てある、愚見では、此句に限らず一章八句が悉く連環してある、善導獨り佛の正意を明かにして定散と逆惡とを矜哀し玉ふ、矜哀する故に光明名號の因縁を顯はし、顯はした故に本願の大智

海に開入させる、開入する故に行者が正受金剛心する、正受の故に慶喜の一念相應し、相應する故に韋提と等しく三忍を獲る、獲忍する故に速に法性常樂を證ると、斯様に連環して味はゞれる、特に此一章のみならず、今偈一部が皆斯様の文勢に出來てあると私は常に味あふ事である、
行者正受金剛心乃至相應後、

此二句は十四行に據つて造語せられたものである、

上の句に本願の大智海に開入せしむとある故に、此

には其開入した結果を擧げて、行者正しく金剛心を受けてと云ふ、文軌に上の句を大行とし今は大信を示すと云ふ、尤なる事なり、

扱、行者とは、矜哀する所の定散逆惡の機類なり、是等の諸機が本願の大智海に開導歸入したる故に、正受は元來三昧の翻語にして、正は邪雜の念を離れ、受とは法を領納するなり、今は聞信の代名にして、即ち二尊の遺喚を聞いて猶豫の念やみ、一心正直に願力に乗ずる所を、正しく金剛心を受けてと頌せられた

もの、金剛に法、喩の二あり、定善義寶池の釋に、金剛と云ふは即ち是れ无漏の體なりとあるは法金剛なり、散善義に、此心深信由若_二金剛_一とあるは喩金剛なり、法金剛は即ち是れ佛智なり、喩金剛は行者の信心なり、法喩且く別なれ共其體_二一なし、佛の金剛心を受る故に其心を金剛に喩へる事が出来る、今の文では法金剛に當る、併し金剛心の外に正受があるのではない、何とならば、衆生の信順は二尊の遣喚が其體である、佛心が行者の上へ來りて正受となるのである。

る、故に化土卷にも教我正受と云ふは、即ち金剛の眞心なりと釋し、又信卷本にも、能生清淨願心と云ふは金剛の眞心を獲得するなり、本願力回向、大信心海故、不可_二破壊_一、喩_三之如_二金剛_一也と、以上要訣の釋よし、金剛に十四義ある事大乘義章に見ゆ、十四あれ共、つまりは堅固と利用の二法に歸する、他力の信心の破れぬ處は堅固の徳なり、他の邪説を摧折するは利用の徳なり、

慶喜、一念相應後とは、慶喜の一念は上の正受金剛心

の事である、次の句に得益を明さん爲めに、上の金剛心を名を替へて引出したものである、信卷末に、大慶喜心、卽是眞實信心、々々、々々、卽是金剛心とあり、又略鈔には、金剛心卽は無上心、々々々卽是淳一相續心、々々々々卽は大慶喜心とあり、何れも他力信心の異名なる事知るべきぢや、爾るに種々の名稱中に、今特に慶喜心の名を擧げらるゝ事は、次の獲忍に應ぜんが爲である、此慶喜心初後に通ずる中に、今は別して發起を取るから一念と云ふたもの、卽ち信の一

念の事である、相應とは、上には正受と云ふ、心受であるから相應する、禮讚に、佛の本願と相應する事を得るが故にとあるが夫である、以上要訣の説よし、扱、後とは、得益の時を標したものの、此の後の字に就て、果して得益の時ならば、慶喜、一念相應時とあるべし如何と云ふに、蹄涔に是は後とすべき譯あり、其故は、一念相應の時、三忍を獲ると云ふは佛知見に約して云ふ事なり、行者の方では、一念相應の後に決定心に成りて始めて喜ぶ、慶喜相應の後でなくては獲忍

の相は見へぬ、夫故後の字を用ひねばならぬとなり、又文軌には、二途にして見る意、一は慶喜、一念相應の場で直ぐに命終すれば、跡は彼土にして即證法性之常樂となる故に、此時は與韋提等獲三忍の暇はない、二には正受金剛心は前念命終なり、與韋提等獲三忍は後念即生なり、夫で慶喜の一念相應の後念即生にして、正定に住する故にと、兩説共に難有く味はれる、

與韋提等獲三忍等二句、

此句は上の相應後を承けて現生の得益を明かしたものなり、韋提と等しくとは序文義、定善示觀縁の下に、言心歡喜故得忍_レ忍者、此明阿彌陀佛國淨光明、忽現眼前、何勝踊躍、因慶喜故、即得先生之忍、亦名喜忍、亦名悟忍、亦名信忍、此多是十信中、忍、非解行以上、忍也の文が據り所である、韋提は具さには韋提希なり、譯して思惟と云ふ、等とは齊等と平等との二義あり、要訣に、行者に約すれば齊等なり、所得の忍に約すれば平等と云ふ、良し、

三忍とは、束ぬれば无生法忍なるが、扱、无生法忍とは、忍は忍可決定の義にして、常途では无生无滅の諸法實相に於て忍可決定して不動を云ふなり、今は无生法とは彌陀の名號である、論註に名號を實相法と云ふてある、名號を聞いて他力攝生に安心したるが无生法忍である、經に信心歡喜と云ひ、又廓然大悟と云ふ、是が信喜悟の三である、疑ひなきが信忍なり、歡喜が喜忍なり、往生に落附たが悟忍なり、つまり他力安心の異名に過ぎない、時に此三忍を大師

釋して、此多是十信中、忍、非解行以上、忍也と云はれたのは、諸師が觀經の對機を八地以上の菩薩杯と釋した故に、之に反して十信中と撰ばれた事なるが、十信と云へば内凡の位にして外凡ではない、故に普通外凡は三忍を得ざるやとの疑がある、六要に之を通じて、雖爲薄地底下、凡夫、今依他力超絶、強緣、成就信根、故就得忍、謂之十信とある、然れば信の字に因て十信と云へ共、決して聖道の位の沙汰でなく、他力別途の得益であるから常途階位の談とは違

ふと合點すべし、扱、又觀經に依れば韋提の得忍は佛を見て得たのである、今日の凡夫は佛を見ずして韋提と同等には行くまじとの疑難もあらんが、是は玄義分中特に標して第七に、韋提聞佛、正説、得益分齊を料簡すと云ふてある、正説と云ふは第七觀の初めを指す、若し見得ならば欣淨縁の中で得忍すべきに、第七觀の初めに至て忍を得たるは佛説を聞いて得た證據である、何故に聞いて得るぞとならば、彌陀の願意であるからである、聞其名號、信心歡喜と云

ひ、聞名欲往生、皆悉到彼國と云ふが如し、然るに聞で得忍するならば、第七觀の初めに除苦惱法を聞いて即ち足るべし、何故に彌陀空中に現じ玉ふやとの不審があるう、是は聞即見なる事を顯はして疑を去らんが爲めなり、故に釋に應聲即現、證得往生とあり、應聲即現の佛なる故に聞信即見佛なり、如此韋提已に聞いて先生忍を得る故に、滅後の衆生も聞信の處で韋提と同じく三忍を得る事勿論なりと知るべし(以上要訣)。

即證_二法性之常樂_一とは當來の益を示す、現生已に韋提と等しく三忍を得て、當來には臨終一念の夕べに大涅槃を證する故に即證と云ふ、即ち同時と異時とある事上に大論を引くが如し、此句は玄義序題門に、捨_二此穢身_一即證_二彼法性之常樂_一とある文に依つたのである、法性、佛性、眞如、一如、實相等、同體異名にして涅槃の代名詞なり、常樂は具さには四徳の事、今二徳を擧げて餘を攝したものである、以上終南章了る、

源信廣開_二一代教_一、乃至勸_二一切_一、

是より第六祖源信和尚の章なり、和尚の傳は七祖傳に委し、釋書の四にも本傳がある、一代經を殆んど諳んぜられたる證として、同書に宋の朱仁聰來朝して越前敦賀に艇泊の時、和尚弟子寬印を連れて御見舞になつたれば、壁間に畫像ありて船中の守護と崇めてあつた、仁聰之を指して和尚之を知るやと云へば、和尚花嚴の善財讚嘆の偈を記憶して、筆を把て見_二女清淨身_一、相好超_二世間_一と像の上に書きて、寬

印に次の句を記せよとありしに、印直ちに如_二文珠師利_一、亦如_二寶王山_一と記したれば、仁聰嘆じて一代の藏經は二師の腹にありと申した事である。往生の時には天樂空に響き奇香四もに散じ、山中の草木皆西に靡くと記してある、

扱、廣開の一句は智解を讚し、偏歸の一句は行を讚すと、刊定の説よし、又要訣の意に、廣開一代は何の爲めぞ、總じて二門の教を討ぬるが爲めなり、偏歸安養は何の爲めぞ、別して淨土を以て自の所歸と

せりと、但し偏歸の句は自行化他に涉る、

要集序文に、夫往生極樂之教行、濁世末代之目足、道俗貴賤誰不歸者とは勸一切なり、如_レ予頑魯者等とは自の所歸なり、和讃に、本師源信ねんごろに、乃至おしへける、此二句と粗ぼ同意である、因みに要訣に往生要集の釋を引いて云く、就_二此集_一有_二廣略_一要、廣者即一部始終十門七十科是、略者曰、助念門中總決要行、七法、要者極略中明_二稱名_一、又證據門中證_二稱名_一故、此是聖者、指揮、應_レ爲_二讀_一要_二集_一之大例、初廣

例者以觀爲正、稱名是傍、此順觀經、顯說、第十九願、義、次略例者、與前廣反、稱名爲正、其餘是助、曰念佛爲本故、此順小經、顯說、廿願意、後要例者一切皆廢、唯稱獨存故、釋云、三要者約念佛、一行勸進之文是也、乃至私云、惠心盡理定往生得否、以善導和尚專修正行文而爲指南也等、故引本願證極略中、黑谷承念佛爲本者、實於此處、偈主則就黑谷取、此中及和讚所述、一是要例、意矣已、

是で往生要集の實義を合點する事が出来るなり、又因みに巒綽の諸師、捨本宗而專淨土、和尚則不改本宗に付て疑難あらん、要訣之を解して、巒師等捨本宗、知捨而有利益也、集主在臺嶺而製此集、猶如西伯服事于殷而爲王基、見不捨而有利益也、聖者之作事、要當時機、適化無方、陶誘非一、非凡情所得而圖也、云々、辯得而卓矣、專雜執心判淺深、報化、二土正辯立、

此二句は因と果と對辯して得失を顯示された事を頌

するなり、要集一部の法門の要點にして和尚の特色を顯はすは此二句である、扱、專雜は修行に約し執心は信解に約し、報化は證果に約して明かすと刊定の釋は尤もなれ共、此處では行と執心とを組合せて、執心の方に重きを置いて得失を知らせる明かし方である、夫故行と執心を別々に見ては偈文の意に叶はぬ様である、左なくば專雜と執心との淺深を判すと讀まねばならぬ事になる、略鈔の偈では、決_二判得失於專雜、廻_二入念佛、眞實門_一と、二句で行の得失を明

かし、唯定_二淺深於執心_一、報化_二二土正辯立と、二句で執心の得失を示して都合四句にしてあるから、行と信とが明瞭に區別してあれ共、今偈の上では一句に束ねて行信失す、故に二つを組合せて得失を明かす事になつてある、畢竟專修の人は本願に相應する故に信心深く、雜修の人は本願に相應せぬ故に信心淺きが實際であるから夫を判決し、而して到る所の土に於ても亦報化の別ある事を正しく辯立されたと云ふ意味である、

扱、此二句の據るは、要集下卷問答料簡の第二、往生位階章の終りに三番の問答がある、第一番は、近來淨土を求むる者多けれ共、往生を得る者甚だ希なるは何故ぞと問ふて、其答へに、樂集の三不三信の釋と、禮讚の念々相續畢命爲期の者は百即百生じ、雜修の者は百に一二、千に五三とある釋を擧げられた、是が因に就て果を判斷したのである、扱、第二番は、前の駄目を押したので、第三番は、菩薩處胎經を擧げて、此經に懈慢界に生ずるは億千萬にして、阿彌陀佛國に生ず

るは其中で時に一人ありとあれば、往生は六ヶ數でないかと問ふて、其答には、群疑論を擧げられた、群疑論に此難を釋して、上の禮讚の文と、處胎經の何以故、皆由執心不牢固の文とを合證して、是知雜修之人、爲執心不牢固之人、故生懈慢國也、若不雜修、專行此業、此即執心牢固、定生極樂國、乃至又報淨土生者極少、化淨土中生者不少と云へる咸師の自釋とを擧げられた、是が果を擧げて因を辯じたものである、以上二文が專雜の得失を判斷して報化の二土を

辯立された明文であるから、今は其趣きを二句に顯はしたのである、

扱、報化の名義に就て、惣じて誓願に報ふの土であるから、彌陀の淨土は報土ぢやと云ふが道綽善導二師の據りである、乃ち兩師の上では彌陀の淨土に化土はなき様に見ゆれ共、綽師の始終兩益の釋より云へば報化の二つある事は明かであり、又導師地觀の釋に、修因正念にして不得雜疑、雖得往生、含華未出或生邊界、或墮宮胎とあれば、是又報化ある事

勿論なり、元來經に胎生邊地の金言あり、龍樹之に依て疑則花不開等と釋せり、然れば報化二土は佛祖相承の宗義なる事知るべし、爾る時に化土は報土の内外何くに在りやの不審生ずる筈なり、勿論眞實報土は廣大无邊際とあれば内外のあるふ筈はない、爾る時は報土中に化土があるは如何と云ふに、勦說に之を釋して、是は但一種報土の中で誓願の眞假及び機の信疑に依て且らく差別する計りで土體は一なり、疑惑の行人は眞に卽して假を見る、正信の行人は假

に即して眞を見るなりと云ふてある、又蹄涔にも眞
 佛土の祖釋を引いて、觀經の佛の如きは十九願成就、
 相故、爲定機、所見、若能入本願海、與佛智相應、出
 來見之即眞佛、唯見其相不達其體、皆名爲化土、
 機と云ふてある、是で合點すべし、和讚、靈山聽衆と
 おはしける、至定めたる、專修の人をほむるには、至
 のべ玉ふ、報の淨土の往生は、至教へたり等、照し味
 あふべし、

極重、惡人唯稱佛等四句、

以下は源信和尚の教化を紹介せらるゝので、即ち叙
 言の方である、此正信偈の文に於て、本師龍樹以下七
 祖の章中には叙事と叙功德と叙教化と三通りの體を
 用ひてある事を最初に申し遺したから、此ここで斷り
 置くべし、先づ龍樹章では、釋迦如來より證安樂迄は
 楞伽經に依て龍樹の歴史を叙したのであるから、叙
 事體の偈文である、扱、顯示難行の二句は、易行品に依
 て龍祖の功德を讚嘆したのであるから、叙徳の體で
 ある、次に憶念彌陀佛等の四句は、龍祖の教化を紹介

せられたので、叙言の偈文と云ふべきぢや、天親章では、最初より彰一心迄の六句は法門發揮の功德を讚したので、叙徳の體である、歸入功德等の六句は、天親菩薩の教化を紹介されたので、叙言の體である、曇鸞章では、初めの四句は叙傳にして、天親菩薩等の四句は法門發揮の功を讚し、後の四句は叙言の體なり、道綽章では、前の六句は叙徳にして、末の二句が叙言である、善導章では、前の四句が叙徳にして後の四句は叙言なり、源信章も前の四句で徳を叙し、後の四

句で教化を紹介されたもの、之を合點して置けば今偈を味ふに頗る便利である、

扱、此四句に就いて、初めの一句は、要集下卷念佛證據門に示されたる下々品取意の文に、極重、惡人、無他、方便、唯稱念佛、得生極樂とある四句を一句に造つて和尚の教化を述べられたもの、又我亦在彼の三句は、集の中卷雜略觀の中に、又彼、一一、光明、遍照十方世界、念佛、衆生、攝取不捨、我亦在彼、攝取、中、煩惱障、眼雖不能見、大悲无倦常照我身とある文を

三句に造語して紹介せられたのである、爾るに何故に箇様に彼此の文を勝手に取り合せられたるやと云ふに、此句の本たる四句の文は下々品の取意であり、又我亦在彼の本は眞身觀の念佛、衆生攝取不捨と、佛心者大慈悲是也の文とである、觀經一部に於て念佛の利益を勧められた肝心は、定善の中では眞身觀、散善の中では下々品であるから、和尚も此二ヶ處を肝心の着眼として釋し置かれたのであるから、今は兩所の文を取り合して之を和尚教化の極要として紹介

せられた事と味は、れる、夫で極重、惡人唯稱佛とは、元祖の所謂る極惡最下の機の爲に極善最上の法を説くの意味にして、第十八願の意である、觀經の機實と大經の法實とを合して説かれたが下々品であるから、其意を以て極重の惡人は本願の念佛より外に助かる法なき故に、一心一向に之を修せよ、是が釋尊の勧めぞと教へ玉へるものである、其一心一向に修する味ひは次の三句で知るべきぢや、

我亦在彼の句は上に引く如く、雜略觀に於て念佛、

衆生攝取不捨の經文を擧げて、我亦在_二彼_一攝取之中、等と自らの喜びを述べられた譯は、元來觀經の表面では念佛は觀稱に通じて、而かも勝劣を云へば觀を勝とし稱を劣としてある、乃で觀念で攝取を蒙むるが主になりて稱名は伴である、伴でも佛の攝取に二つは无き故に、和尚は自ら下機に同じて、我も亦た觀念は出來ねども稱名に依て觀念の人と共に攝取の中に在りと述べられたのである、

煩惱障_レ眼雖_レ不見とは、障眼を肉眼とすると心眼とすると舊註には二途あり、刊定要訣は心眼とし、勦說文軌等は肉眼とす、愚は心眼の方と思ふ、觀察は心眼が本にして肉眼に及ぶのである、已に攝取心光とあれば心眼で觀ずるが當然なり、善導の釋にも心緣_二其事_一曰_レ觀、觀心分明曰_レ察とあれば、心眼でなくてはならぬ、然るに煩惱の障りで觀心分明とゆかぬ故に見る事叶はぬのである、乃で雖不見と云ふ、雖の字は兩向の辭と舊註に見ゆるが、此字はたとひとも訓じて、煩惱の爲めにたとひ無數の光明は心眼に

見へぬ共と云ふ意である、見へぬ處は悲むべき様なれ共、大悲無倦常照我で、彌陀無縁の大悲は稱名の別願に酬へて、攝取不捨と常住不斷に我を照し玉ふ事を合點して見れば誠に喜ばしき事なりと、不見の悲みを轉じて常照の仕合を喜ぶ意味を自白せられた文なる故に、上の極重、惡人と一組の偈文として、和尚の自信即教人信を紹介せられた事と味ふべし、勦說に煩惱の句は信機、大悲の句は信法と云ふ、よし、以上にて源信章は了る、

本師源空明_ニ佛教_一、乃至弘_ニ惡世_一等四句、

是より第七祖黒谷聖人の章である、上人の傳記は拾遺古德傳を以て第一の精確なる者とす、元享釋書の傳は禪宗の眼で書たもの、勅修傳は鎮西流の眼で書たもの、古德傳は眞宗の眼で書たものなるが、覺如師の筆は公平無私にして、特に安心法門の點に就ては上人の眞意を顯はして書かれたのであるから、之を第一とすべきなり、眞宗五祖傳は古德傳に基いて書てある故、是も精確と云ふてよし、上人は我が宗

祖の稟承せられたる本師であるから、特に吾人の尊崇すべき所である、

扱、此四句は上人化他弘通の大綱を讚嘆せられたものなり、本師は本宗の祖と云ふ事、曇鸞章に於て辯じた通りなり、源空の二字は最初の師範源光阿闍梨と、叡空上人の片名を取りて諱(法名)とせられたのである、

明佛教とは、明は了知の義なり、佛教は總じて聖淨二門の聖教を指す、略鈔の偈には源空曉了諸聖典とあり、上人は臺教を皇圓阿闍梨に受け、密乘梵網は叡空上人より傳へ、三論俱舍成實を寛雅法師に受け、唯識を論じては藏俊法師を驚服せしめ、華嚴を説ては慶雅法師を嘆服せしめられた事傳記に見るが如し、黒谷の報恩藏に入て一切經を五遍披覽し、善導の觀經疏等を八遍讀みて出離の要津を決著し、年來の宿願満足を得て、目の當り光明大師半金色の勝相を感じ、之より念佛門を弘通せられた、是が佛教に明かなりとある概要なり、上人の佛教に明かなる

は只博學と云ふ計りでなく、生死出離の要道を得られたのである、所謂る解行兼備せられたのである、故に當時智慧第一の上人と諸宗舉りて推服したのである、

憐愍等とは、前の一句は上人の智慧を讚したる故に、此句は上人の慈悲を讚するのである、是で智慧慈悲の二法全備したる事を示すなり、

善惡凡夫とは、善人は自の善を負んで無上の佛智を知らず、惡人は自棄して無縁の大悲を知らず、共に

生死を出づる事の出来ぬのは弘願眞宗を知らぬからである、夫故之を憐愍するの大悲起るなり、

眞宗の教證とは、眞は眞實にして方便に揀ぶ、宗は宗旨なり、能詮に對するの言なり、具さには淨土眞宗と云ふ、二卷鈔に法事讚を引いて三經の宗を區分してある、三經は一の淨土宗にして共に正明_二往生淨土の教であるが、中に於て二經は方便なり、只大經を眞實とす、今は方便を揀んで眞實を擧ぐる故に淨土眞宗と云ふ、爾るに選擇集には淨土宗と曰ふて眞

宗の目なし、彼集には専ら撰擇本願を顯揚して方便に亘らず、特に信心を以て能入としてあるから、彼に云へる淨土宗とは即ち眞宗である、六要の一に眞宗と云ふは即ち淨土宗なり、夫故淨土眞宗と云ふ目は宗祖が始めなれ共、名くる所の本は選擇集に在るのである、行卷に選擇集を引いて後、念佛成佛是眞宗、及び眞宗難遇の文を引かれたるは夫が爲めである、元祖の門弟數多あれ共、選擇集の義を正直に受けて弘通されたるは宗祖一人である、宗祖の法義は毫も私

を容れず、夫故本典の末尾にも、眞宗興隆の大祖源空法師と稱して相承の義を明らかにせられた、彼こには其人を推し今は法を稱したるものなり、教證とは、具さには教行證である、聖人下に被らしむるを教と云ひ、衆生稟受するを行と云ひ、行の結果は證である、教行證に二門の不同あり、聖道は衆生の自心に就て之を立つ、衆生は時に隨て汚隆する故に此の三つ漸く衰廢す、淨土眞宗は願力の所成にして、願力常住なるが故に三つ共に變りなし、化土卷

に、信知聖道諸教爲_二在世_一、正法、而全非_二像末法滅之時_一機也、已失_レ時乖_レ機也、淨土眞宗者在世_一、正法、像末法滅濁惡、群萌齊悲、行也と、今は衰損する者に揀んで常住の法を標する故に眞宗教證と云ふ、教證の二を擧ぐるは次の句に行を明すからである、時に元祖は三經一論を正明_二往生淨土_一之教と二門章に釋せられた、爾る時は宗祖の大經のみを眞實教と釋すると師資相違に非ずやと云ふに、是れは元祖は廢立に約して三經を同一と見られたもの、宗祖は顯說に就て

二經を方便と揀ばれたので其實は同意である、其證は二門章に、凡案_二三經_一意、諸行之中、選_二擇念佛_一、以爲_二旨歸_一と云ふて、次に八種の選擇を列ねて後に之を結んで、故知、三經共撰_二念佛_一以爲_二宗致_一耳と云ふてある、又祖師は三經、眞實、選擇本願爲_レ宗也、復_二三經_一方便、卽是修_二諸善根_一爲_レ要也と化卷に釋せられた、之を以て同意なるを知るべきぢや、教に就て同一なる事上の如し、又證果に就ても約對章には、安樂集の始終兩益の文を擧げて二行の證果の得失を明かし、

和語燈七にも念佛往生の人は報佛の迎にあづかる、
 雜行の人の往生は必ず化佛の迎にて候なり、念佛も
 或は餘行を雜へ或は疑心を聊かにても交るものは、
 化佛の來迎をみて報佛を隠くし奉るものなり、又第
 五卷にも、本願の念佛には獨り立ちをさせて助けを
 ささぬなり、助けさす程の人は極樂の邊地に生ると、
 之にて知るべし、

選擇本願とは、具さには選擇本願、念佛である、選擇
 本願は第十八願なり、本願章に彌陀如來餘行を以て

本願とせず、唯以念佛爲往生之本願之文と標し
 て第十八願を引いてある、爾るに同章には、一往四十
 八願に約して各選擇攝取の義を示してあるから、何
 れも選擇本願の様なれ共、特留章に至て、凡そ四十八
 願皆雖本願、殊以念佛爲往生、規、故善導、釋云、弘
 誓多門四十八、偏標念佛最爲親の文を擧げて、故
 知四十八願之中、既以念佛往生之願而爲本願中之
 王也と區別してある、上人一代の主張は選擇本願、
 念佛の一本槍である、是れが上人の特色で、而も六祖

の精髓を相承された所であるが、今も特に此名目を挙げたもの、弘惡世とは五濁増の時に弘通せられた事を讚嘆したものなり、

還來生死以下四句、

此四句は、元祖の誠疑勸信の釋意に依て頌したもので、即ち上の選擇本願念佛に就て縷々其要旨を示し勸められた事を紹介されるのである、上の句は本願の行にして此以下は本願の信心である、即ち選擇集では上の句は二行章三輩章等に當り、此句は第八

の三心章の意である、即ち三心章の私釋に深心を助釋するに附いて、二者深心、言深心者深信之心也、當知生死之家以疑爲所止、涅槃之城以信爲能入とあるが、今の四句の本據である、此私釋が實に念佛の奧義であるから今偈にも之を讚述し、又和讚にも之を讚述して師資相傳の主眼となつてある、深く着眼せねばならぬ、

扱、生死輪轉家とは、撰擇集では生死之家とあるを輪轉の二字を加へて其義を明かにせられたものな

り、生は死を有し、死は生を有して无窮なるを云ふ、故に之を輪轉と云ふ、廿五有界の事なり、巒師の此三界是生死凡夫流轉之閻宅と云へるに同じ、凡夫所住の處なる故に家と云ふ、還來とは出離する事の出來ぬを云ふなり、扱、其還來の所以は次の句に在り、決以疑情爲所止とは、上の所由を釋したるものなり、決は決斷なり、撰擇集の文に以疑爲所止とあり、是れ元祖の決判なり、疑情は信智の反對なり、佛の願力を聞き乍ら已が胸臆で思案し猶豫して信ぜ

ぬが疑情である、所止とは能止の義なり、三界を出んとするに出られぬは止める者があるからである、其止めては誰れぞ、疑情であると決判せられたもの、此處には方便化土ある事を云はずして、疑情に拘つたならば決して三界を出る事ならぬぞと深切に誡しめて、下劣の輩の小成に安んぜぬ様に注意されたる大悲の極りぢやと要訣にも云ふてある、難有き講辯と云ふべし、

速入寂靜等とは、速入は頓速に證入するなり、寂靜

無爲樂は水觀の疏の讚に、西方寂靜無爲樂等とあるに本づく、無爲は涅槃の異名である、寂靜樂は涅槃の徳であるから、選擇集には涅槃の城とあるを樂に換へたものなり、涅槃經に涅槃を亦た名けて無爲と云ひ、又有大樂故名大涅槃、乃至大寂靜、故名爲大樂とあり、知るべし、

必以信心爲能入とは、必は定る辭なり、信心とは二種、深信なり、爲能入とは只此一門のみ通入する事を得るが故に能入とすと云ふ、本は大論に、佛法大

海以信爲能入とあり、彼文は經の初めの如是を釋したので、通佛法に約して云ふたものなれど、今は彌陀報土の證果に約して云はれたのである、扱、此四句を和讚には二首に開いて而も勸信と誠疑とを前後して述べてある、即ち、諸佛方便時至り等と、前の一首で今偈の次の二句の方を讚し、眞の知識にある事は等と、後の一首で今偈の前二句の意を讚してある、師資の相傳往生の肝腑深く感味して喜ぶべし、因みに此一章は初の二句は上人の智惠慈悲を讚し、次の

一句は教證を述べ、次には大行、次には信疑勸誡で
大信を明かして丁度四法を讚してあるなり、以上元
祖の章を了る、

弘經、大士宗師等四句、

此四句は、一偈の結末流通である、上來頌し來れる
印度西天以下七祖の相承弘通の一大段を茲に結ぶ事
は、前一大段の終りは彌陀佛本願、念佛の四句で結ん
で、難中之難無過斯と逆勸の語を用ひられた、今段
の終りは逆勸の語でなく順勸を用ひて併せて一偈の

大尾に結ばれてある、

弘經の大士とは、經は大經と見ても三經と見ても通
ずる事なるが、祖師の意では、通じては三經、別し
ては大經なる事上に辯ずるが如し、大士は二菩薩を
云ひ、宗師は五祖を指す、文軌に、惣じては七祖皆
宗師なり、別しては上の如しと云ふ、化卷に四依弘
經の大士三朝淨土の宗師とあり、知るべし、

等とは内等齊等の二義の内、齊等と見るがよし、略
鈔、偈に、論說師釋共同心とあるに參照せよ、極濟は救

度なり、無邊は數多を云ふ、極濁惡は最下劣の機を云ふ、上に五濁惡時群生海等と云へり、道俗時衆とは正しく當時を呼びて滅後に及ぶ語勢を玄義分に取つたものなり、道俗は緇素なり、唯は餘を揀ぶ辭なり、他の諸師も淨土を説けども經の正意を得ぬから之を揀んだもの、可は猶須なり、信とは歸屬の意なり、斯高僧は上の七祖なり、説とは如實に宣説するが故に、爾るに二尊を云はざる事は、既に弘經と云ふてあるから、高僧の説を信ずるは即ち二尊の言を信ずるなり、終了

昭和六年十一月十日印刷
昭和六年十一月廿日發行（定價金五拾錢）

編輯兼 眞繼義 太郎

發行人 眞繼義 太郎

印刷人 福井 安久 太

東京市神田區今川小路二の二

發行所 日本佛教新聞社

電話九段三八一一番

振替東京五九三三四五番

（佛教書籍、佛畫、佛像、佛具、目錄）
ハガキにて右宛御申込次第送呈

終

